

無題

愛媛県 佐々木 義 廣

ガラガラに渴いてたまらなかつた時の事、池に溜まっていた木の葉っぱの落ち込んでいた腐り水をくんできて飲んだ。また伐採の最中頃の事、最も厳寒時、積み込みの組に変わり、夜間作業で積み込みをやらされた。道路端の木材をトラックの横に二本のりん棒をかけ肩をすけてまき上がる、このような真冬の夜間作業には随分こたえた。一番長い間伐採をやったが、この作業も危険性もあつた。次第に作業場が遠くなるので、腹力もない上にソ連製の大きな重い靴を履かされ重い足を引きずりながら歩いていった。

このような苦勞の毎日もいつしか過ぎ、軍隊生活三年、シベリア抑留四年、満七年間の苦勞を耐え、時には生死の境をさまよい、飢えと寒さと重労働にも耐えてナホトカ乗船信陽丸にて舞鶴に昭和二十四年八月上陸、無事帰る事の出来た事を不思議な事に思われます。

患者、家族等平壤へ空輸開始、ソ連軍進駐。ロスケ軍師が来る二日前の八月末日、「参謀の判断が誤りだった。直ちに全機出動。必要要員から平壤へ空輸、平壤から鉄道にてとにかく三八度線以南へ南下せよ」との命にて久しぶり全機出動準備。

先ず隣の陸軍病院の全員と官舎にいた家族を乗せ平壤へ飛行する。私は病身のため「その故障機を修理して次の飛行集団に入って平壤へ飛び、南下して内地に先に帰るよう」と隊長より命を受ける。早速機付兵と飛行機整備故障探求を実施、案内早く修治しがソリンを補給して飛行準備完了する。至急官舎に帰り私物整理し、一人二梱まで、規定であつたがどうしても捨てるに忍びず荷物三梱をとりあえず愛機に搭載し離陸準備に入つてい

た。そこへ第一回目の平壤空輸を終えた重爆機と一式輸送機の編隊群が西南方はるか雲の上に見れた。これが帝国陸軍の編隊群を見た最後になった。ちようどその時、隣の連保飛行場よりジープにてソ連軍使将校数人が到着した。「早く飛行機より降りろ。ポツダム宣言ではその地で武装解除という事になつている」と飛行場に出て大きな声で怒鳴っていた。「再び飛行した時は部隊長を厳罰に処す」と言い渡された。

これがその後シベリア抑留生活への運命の別れ道だったとは知る由もなく、仕方なく言われるままに私はまた荷物を飛行機より下ろし官舎へ引き返した。

まもなくソ連兵が多数やつてきた。それから二、三週間我が飛行機の操縦取扱いと整備の仕方を彼らに伝授した。そして莫大な量の部隊兵器の譲渡、それは平時の兵器検査以上に見事な光景だった。充分手入れの行き届いた兵器すべて（飛行機、自動車、銃、無線機、弾薬、工具、糧秣等）を全格

納庫の外内に並べ員数簿により一つ一つ検査し譲渡していった。兵器は武人の魂として大切に守つてきた物ばかり、今武装解除を受け敵の手に渡ろうとしていた。これで良いのだろうか、目の前で起こっていることが信じられずに実に悔しく情けなかつた。

ソ連軍使は感心して「日本の武人として最後を良く飾られた。我々は責任を持つて全員内地へお送りします」と立派な大嘘をついていた。

兵器の接収を終えると日本兵にもう用はなかつた。兵営を追われ全員官舎地帯に収容させられた。今ソ連兵の手により操縦、我らの頭上を飛ぶ我が愛機。垂直尾翼に記した色の線にて緑色一本は三十一号、赤線二本は五十二号と全機それぞれ思い出せない我が愛機、手塩に掛けて育てた血潮の通う我が愛機、我が子以上に愛し守つてきた主人の情けを知つてか寂しげに感じられてかわいそうでならなかつた。夜になると格納庫より愛機の寂しげに泣く声が聞こえてくるようで行つてみてや

りたくてならなかった。涙が出て止めようがなかった。

ロスケよ、武人の情けあらば我が頭上にて我が愛機の飛行をやめよ。

大正八年六月八日 愛媛県松山市生

第五十一飛行師団第二十五練成飛行隊

シベリア 自昭和二十年九月 至昭和二十三年十月 ナホトカ、カワレルワ、キンスハ、ウス

リースク市(セミヨノフカ)

抑留記

福岡県 羽野 一

昭和十九(一九四四)年三月十日、陸軍記念日、この日牡丹江省東寧の野砲第二一二部隊におきまして桂林作戦出動のための一個大隊独立致しまして、三一五〇部隊と命名され出陣式を行い桂林攻略に出動致しました。十一月に桂林は陥落、二十年の正月は桂林で迎えました。その後すぐに反転命令があり反転致しまして、七月には満州に戻り終戦の時はハルピン飛行場の警備に就いておりましたが、八月十五日も警備に当っておったのでありますが、十一時過ぎ全員集合の連絡があり宿舎に行きました。そこで天皇陛下のお言葉、耐え難きを耐え忍び難きを忍ぶという悲痛な玉音をお聴きし、戦は敗戦に終り無条件降伏という最も残念な結果となつてしまった事を知りました。さあどうなることかと思つておりますと、一時間ほど致し